
未来へ

亜紅亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来へ

【Nコード】

N3008Y

【作者名】

亜紅亜

【あらすじ】

組織との対決も終え、無事に復学した新一。
その新一の身に異変が・・・

二話

それは突然だった。

いつものように寝坊して、蘭が起こしに来て……学校へ行つて茶化されて。

そんな日常がこれからも続いていくのだと思っていた。

でも

そんな時でも、俺の未来は音を立ててガラガラと崩れていったんだ。

く体育中く

今日は俺の得意なサッカーだ。

いつもは楽しくてしょうがないけれど、今日は何かが違う。

体全体がだるいのか、一歩踏み出すのがすごく疲れる。

軽い眩暈までしてきた。

(こりゃく昨日遅くまで小説読んでたからか……ははは)

そう。昨日は優作の新刊の発売日であった。
一度読み出したらとまらなくなってしまい、寝たのは今日の4時である。

（でもおかしいな……。いつもは寝てなくてもサッカーやってたんだけどなあ・・・）

なんてことをのんきに考えながら居るとどこから鋭い声が聞こえてきた。

「工藤！……後ろ！……！」

「え？」

サッカーボールだ。

誰かが変な方向に飛ばしちまったのか、と思いながらとめようと体を動かし

動かなかった

そして意外に威力の入ったボールが新一の後頭部に直撃した。
そして俺はそのまま、崩れ落ちた。

「工藤!!!?!」

「つてええ」

崩れ落ち方が派手だった分、心配も大きかったが本人は普通に起き上がる。

「・・・なんだよ。大丈夫そうじゃなか
新一の様子を見て安心したようだ。

「でも珍しいよな。工藤がボール受け損なうなんて。
いつも難なくやってんのによ」

「あ・・・ああ。

そうなんだよな。今日はなんだかつ?」
その時だ。

右のこめかみから、左のこめかみへ激痛が走った。

「く・・・工藤?」

「くつ・・・つ・・・う」

その間も激痛が走っていた。

(・・・なんだ？この痛み・・・。唯の頭痛じゃないみたいだ・・・)

「おい！中道！職員室に行って救急車を呼んできてもらってくれ！」
あまりにも痛がる新一をみて、教師が指示したのだ。

「おい！しつかりしろ！」
「救急車呼んだからな！」
「工藤！」

そんな声を聞きながら、新一の瞼は閉じられていった。

二話（後書き）

．．．．すいません！文章構成下手ですみません！！！

頭の中ではこのとーりに新一たちが動いてるんですけどね．．．ハ

ハ：

いつも頭の中は「ミニ・劇場」ですねw

そのまま文章に出来たらいいのに．．．

文字にするって難しいですね><

コメントお願いします

一話

神様は不平等だ。

だって新一は世のために命をかけて巨大な組織と戦ったんだよ？
何日も生死の境を行ったりきたりして・・・

それにいつだって事件を解いてる。

一年前、居なくなる前は遊び半分なおころもあった。
でも今は違う。

どんなに小さな事件でも大きな事件でも、ことの大きさは一緒だつて。

命の重さに変わりはないって。

言ってたんだよ？

それに、いつも私を気遣ってくれる。

優しい言葉、かけてくれる。

ちよつとしたことにも気がついて・・・

神様お願い

新
一
を
奪
わ
な
い
で

一話（後書き）

初連載小説です！

文章も下手ですし、意味不明なところのほうが多いかもしれません
^^；

ですが温かい目で読んでくださると嬉しいです^^

三話（前書き）

・・・一話と二話逆になってしまいました><
申し訳ありません・・・
読みにくいかもしれませんが耐えてください！え

三話

シンイチガタオレテレビヨウインニハンソウサレタ？

・・・嘘だ

サッカーなんてあいつの得意科目じゃない
それなのにどうして・・・？

そんな考えを巡らせながら私は学校を飛び出していた

（数十分前）

科目は保健体育

男子はサッカー

女子は保健だった

蘭たちは教室を移動していた

たわいもない話をしながら

「そうそう、蘭。駅前に評判のいいクレープ屋が出来たのよ！
学校帰りにでも行かない？」

「園子って情報が早いんだから。
うーん今日は無理かも・・・。新一の家寄らなきゃいけないし」

「そっかー残念」

なんて話しているときだった

「え？救急車？」

「誰が運ばれたの？！」

「校庭で男子だから・・・うちのクラスじゃん！！！」
「えーマジ？！」

そんな会話が耳に入った

え？運ばれた？

でも今日はあまり日が出てないから熱中症はない
風邪気味や体調が悪そうなのはいなか・・・った・・・？

そのとき朝のことがよみがえった

―だるそうにしていた

―無理に笑っていた

もしかしたら・・・新一が？

そのとき、一番聞きたくない言葉が、耳に入った

「工藤君が倒れて病院に搬送された」

三話（後書き）

・・・さてさて

次話は病院でのことです！

勘の良い方は気付くかには・・・？
w

四話

気付いたときには病院に居た

あの時そのまま学校を飛び出し、走ってきたみたいだ

通りかかった看護師に声をかけ、連れて行ってもらった

工藤新一様

病室につけられた名前が新一が居ることを示している

「新一・・・起きてるかな」

そうつぶやいてドアに手をかけた

ガララ・・・

「新一？起きてる？」

「？蘭。学校じゃねーのか??」

新一は点滴をしているだけだった

「・・・結構元気そうじゃない。運ばれたって言うからもっと重症かと思った・・・」

「ああ、睡眠不足と栄養不足と脱水症状とからしいからな」

「え？睡眠不足は分かるけど・・・栄養不足って」

その瞬間新一は顔を引きつらせた

「え・・・いや・・・ほら！最近事件があつたから！そのまま寝ちやつたりとかー」

「寝ちやつたりとかーじゃないわよ！人がどれだけ心配したと思つてんの？！？！？」

そのままいい合いが続いたが、最後はふたりで笑いあつた

そのときは二人とも知らなかったのだ

薄いドアの前に、真実を告げるものが居る事を

四話（後書き）

お久しぶりです（〃 〃）

期末テストの関係でなかなか更新できませんでした
もーテストの馬鹿（ノ、ノ）（呪）

五話

ガラガラ―

医「ああ工藤君。お友達かね？」

すまんが検査結果と今後について話したいのだが・・・」

蘭「今後って・・・。

新一、そんなに悪いんですか?!」

医者の意味ありげな言葉に、蘭は不安を覚えた

医「なあに。心配は要らないよ。

ただ少し説教をするだけでね・・・。栄養不足なんかでまた来られちゃたまないから」

新「ははは・・・すみません

ってことで蘭。もう帰って良いぞ。心配かけたな・・・。」

蘭「ううん。

でも検査結果。教えてよね！

じゃあバイバイ!」

ガラガラ・・・

新「・・・で？」

医「では？」

新「唯の説教なんかではないんでしょう？」

僕達の話も外で聞いていたみたいだし？」

医「はは・・・さすが高校生探偵。

敵わないな」

新「誤魔化さないでください」

新一の目はもう笑っていなかった

その目は医者を、真実を見据えていた

医「では単刀直入に言おう」

「君の目は失明する可能性がある」

目の前が真っ暗になった

五話（後書き）

・・・はい

意味不明ですね。（´A、1111）

わかってまーす！^^；

その理由も変ですが、温かい目でお願いします（・・・*）（´，
）（´・・・）（´，*）

六話（前書き）

矛盾している点もあるかもしれませんがお許しください。
（
111
）
A

六話

「キミノメハシツメイスルカノウセイガアル

新「その・・・可能性とは？」

もう何がなんだか分からなかった

ただ、平静を装おうとしている自分がいることしか

医「君はA P O T X 4 8 6 9を飲んだことがあるね。

その成分が今になって脳細胞を破壊し始めているんだよ」

新「脳細胞を・・・破壊・・・？」

何故今になって

解毒剤は完璧だったんではないのか

医「その破壊のせいで目につながっている大事な神経が傷つけられるかもしれないんだ」

新「その可能性を下げる方法などはないんですか」

あつて欲しい

少しの希望をかけて問いた

医「残念だが・・・」。

今の医療では不可能だ」

ひゅっ

開いていた窓から風が吹いた
まるで俺の頭を抜けるように
それほど何も考えられなかった

考えたくなかった

もう、何も見えなくなる

もう、蘭の笑顔を見られない

もう、景色も小説も園子も両親も、サッカー中継、暗号なにもかも

大好きな蘭さえ

二度と見ることは許されなくなる

そんなこと

ソ
ン
ナ
コ
ト
ラ
ン
ニ
ハ
ナ
セ
ナ
イ

六話（後書き）

脳細胞破壊で失明って・・・無いですよねΣ（＝。ω。＝；ノ）ノ

すいません

医療知識ZEROなんで^^：

七話

医者が出ていた俺の病室には、開いた窓から夕焼けの光が差し込んでいた

その光に当たりながら、俺の頭の中は医者 of 言ったことがリフレインしていた

「君の目は失明する可能性がある

「今の段階で治療法はない

「ただ、治療法が見つかるまで通院しながら生活してもらってもいい
「親御さんや、大切な人に・・・話しておきなさい

「ハハ・・・」

俺の乾いた声が病室にこだました

「なんで

「ちくしょう・・・」

「なんで・・・

「ちくしょう・・・」

「なんで・・・！！！！

「ちくしょおおお！！！！！！」

何故、また蘭を悲しめる。苦しめる。

何故、また縛り付ける。もう開放してやってもいいじゃないのか！
それに……

何故、灰原をまた孤独に追いやる

あいつは優しい

だから、自分のせいにして知らぬ間に自分を追い詰め苦しめる
そして、知らずに孤独のふちに立っている

こんなこと、どう伝えろって言うんだ

母さんだって、父さんだって、迷惑をかける

蘭も重いものを持たせてしまう

灰原を孤独に追いやってしまう

クラスの皆にも、心配をかける

それに、俺の頭にボールあてたの……後藤だっけな

今、すっげービクビクしてんのかなー……

わりいことしたな

あ
・
・
・
・

俺、逃げてんのかな

真実から目をそらそうとしてる

だめだな・・・探偵なのに

探偵・・・？

服部にも言わなきゃ・・・

コンコン

病室のドアが叩かれた

「どうぞ」

誰だ？

「工藤ー！大丈夫かー？」

「ごめんな、工藤君。いきなり来てもーて」

「新一、あのね事務所に来ててお見舞い行ってくって言うてから・・・
つれてきちゃった」

俺、
今

最悪

「新
—
・
・
・
・
?」

どんな顔してんのかな

「おい、工藤。顔真っ青やぞ？どうしたんか？」

ー
ど
う
も
し
ね
え
よ

そう、笑って返したかった

でも、もうそれは許されない

八話

「なんでも・・・ねえよ」

笑って言いたかった

こんな、無理やりの引きつった笑顔じゃなくて

「あほ抜かせ！そんな青い顔しとって大丈夫なわけあらへんがな！」

「新一、どうかしたの？気持ち悪い？」

どうしよう

こいつらにもう話してしまおうか

きっと受け入れて、一番に気にかけてくれるかもしれない

でも

いつも通り、笑い合う事は出来ない

いつも通りの関係には戻れない

俺の事で無駄に気を使わせる

そんなのは絶対に嫌だ

俺の事で無理に笑う姿なんて見たくない

だから――

「なんでもねえって
寒くなってきたから。そんだけ」

俺は無理にでも笑う
嘘をつく

「ほんまかあ？
寒いっていうより、青白いって感じやけど・・・」

・・・なんでこいつ、来たんだよ。ばれちまうじゃねーか

「工藤君がなんでもないゆうんならええんちゃう？
問い詰めることもないやろ」

「そうだね。新一、本当になんでもないんだよね？」

「ああ。心配すんな！」

そう言いながらもこめかみに鋭い物で刺されるような激痛が走った
思わず顔をしかめた

「・・・俺は納得せえへんのやけど・・・
まあええか」

（今度しつこく問い詰めてやる・・・覚悟しとけやあ）

平次の周りに漂うオーラに3人は引いていた

「へ・・・平次？どうかしたん？」

「ん？なーんもせえへんよ。」

あつ！そーいえばのどか沸いてきたなー。ねーちゃんと和葉で買
つてきてくれんか？」

和葉達は飲み物を買いに病室を出て行った

「もうええで」

「？何が」

「強がん。ボケエ。頭、痛いんやろ。我慢してんのばればれやで」

「・・・やっぱばれてたか・・・。」

「ばればれやで。」

「・・・なにもきかねーのか」

「聞いても答えんやろ」

「は・・・流石だな」

「・・・でも一つだけ聞いておくわ。」

「お前、病気なんか？」

「違うよ」

「・・・さよけ。」

俺先帰つとくわ、和葉たちにもそーいつといてや」

「ああ。悪かったな」

ピ
シ
ャ
ッ

病室のドアを閉める音。
服部が出て行く音がした

‘違う’と言った声
自分でもビックリするぐらい、
かすかに

震えていた

服部は気付いてんだろうな

俺が退院するまで、あと2日

八話（後書き）

関西弁、難しいですねー。
（A 1111）

九話

あっという間に2日間が過ぎ、退院の日

「じゃあ、週に1度の通院は忘れずに。どうしても来られない日が出来たら連絡をしてくれよ」

「はい。ありがとうございます」

医師との軽い会話を済ませ、急ぎ足で病院を出た。

すぐに外の空気を吸いたかった
大きな空を見たかった

「——っ」

見えたのは雲ひとつ無い青空
その青は怒り、欲望、殺人などと俺の中にあるものが含まれていないような青だった

俺は一体いつまでこの空を見られるのだろうか

一年？三年？もっと短いかもしれない

思わず熱いものがこみ上げてきた
そのとき

「新一くっく！」

振り向いたら蘭がいた
しかも服部を連れて

「・・・おねーらどうしたんだよ
学校は？」

「やだ、新一。
もう冬休みよ？昨日から」

「あ・・・」

俺のいない間にもう冬休みになっていたのだ
クラスに顔も出せないで終わったな

「蘭は分かったけど・・・服部と和葉ちゃんは？」

「一昨日帰って昨日夕方に来たの」

あいた口がふさがらなかった

「ちゅーわけや。工藤。今日とめてやー」

「は?? 蘭の家じゃないのか?」

「あほ抜かせ。毛利のねーちゃんに悪いやろ。

それにお前に聞きたいこともぎょーさんあんなや」

「・・・まあーいいけどよ」

話しながら帰っているうちに工藤低についた
俺は安心したのか鍵を開けると

眩暈を起こし

その場にうずくまった

幸い蘭や和葉ちゃんは別れた後だった

「工藤?! 大丈夫か?!」

「っ…ああ。わりいな」

もうこいつには嘘は通じない
そう思うと同時に話す覚悟を決めた

「・・・全部、話すよ」

平時の顔が引き締まったように見えた

「ああ・・・」

ソファーについた途端、俺は意識を失い眠りについた
起きたときはきつと夜中だろう
夜中でも平次は起きているだろう

tu

長い夜が始まる

九話（後書き）

最後のせりふ、入れたかっただけです¥¥¥¥¥¥¥あは

十話

「な・・・んやて」

服部の驚いた声が木霊した

意識を失ってから、2時間ほどして目を覚ましたら前に服部がいた
それから俺の身に起きる事を話した

「そんなの・・・嘘やろ」

「嘘じゃねえよ」

ほら、余計な心配をさせ困惑させる
やっぱり言わないほうが良かったのだ

などと思ったとき

「工藤。苦しかったやろ・・・」

「?!」

「そないな事一人で抱えてたんや。辛いやろ

それにお前は、こんなこと話さないほうが良いんじゃないか、と
か考えてるんやろうしな!」

「うつせ」

「まあ、ちいとびっくりしたけど、100%治らんわけやないんや
ろ?」

「だつたら大丈夫や！」

・・・ああ。服部はこういう奴だったな
どんな最悪な状況でも、どんなに汚れているところでもいいところ
を見つけそれをさらに輝かせる

すごい奴だな

こんな奴が俺の傍にいたのに、今まで気付かなかった

「・・・そういうことか」

「なにがや？」

きつと蘭も、服部と同じなんだ

少しの可能性を信じて待っていてくれる
コナンのとき、なんだかんだ言っても待っていてくれたのは俺を信
じてくれてたんだよな

・・・いまさらになって改めて分かるって、笑えるよな

俺の周りの奴は・・・皆強い

強くて頼れる

ありがたいな

「オメーらは強いな」

「あん？なにがや、剣道かー？」

「ちげーよ・・・まあそれもだけど」

「明日、灰原にも言いに行くよ。博士にも」

「え」

「着いてきてくれるか？」

「ああ」

俺は工藤の強い眼差しに目を逸らしそうになった

今までは工藤が俺たちに目を合わせなかったのに

今度は俺か・・・

あのちっこいねーちゃんはどう思うやろか

びっくりするやろか

工藤もそれ承知やろうに・・・

それも受け止める強さがあんなや

工藤

俺らより、お前のほうが強いぞ

十話（後書き）

あ（＊＾　　＾＊）

最後意味ぶーちゃん。
・
・＊・
。（。O。
）
。||
、
、
＊
（
O

十一話

「・・・じゃ、行くか」

「おう」

新一の声を合図として二人は阿笠邸へと足を踏み入れた

「おーい博士」

「じゃますんでー」

「・・・あなた達チャイムも押さずに勝手に入ってくるの止めなさいよ」

「ああわりいわりい。それより灰原、時間あつか？」

「構わないけど・・・なに？恋愛相談ならお断りよ」

「んなことじゃねーよ。出来れば・・・博士も一緒に」

「・・・分かったわ。座って待ってて。お茶でも入れてくるわ」

灰原は何かを察したように新一らを座るよう促した

（彼、何かを決意したような感じだった。蘭さん関係でもない。じやあ・・・もしかして・・・）

灰原は一つの最悪な可能性を思い、お茶を入れる手がかすかに震えだした

（そんなーーーーまさか）

お茶を持っていくと博士も来ていた

「なんじゃ？話って」

「ああ・・・ちょっと伝えなきゃならないことがあってよ」

「伝えなきゃならんこと？」

「ああ」

「俺は

失明するかもしれない」

二人、灰原と博士は目を見開き驚いていた
服部はたとえ一度聞いたとしても、理解していたとしても再び事実
を耳にし、苦痛な顔をしていた

少しの沈黙があつた

「どういう……ことなの」

その沈黙を破つたのは灰原だった

「どういうことも、何もねえよ。俺は失明するかもしれない。そん
だけ」

「そんだけって……!! あなた自分の状況分かってるの?!?!」

「ああ」

「つ……。どうせA P O T X N 4 8 6 9の解毒剤のせいでしょう？」

「ああ。脳細胞が破壊されてるらしい。その破壊で目へつなぐる神
経を傷つけてるみてーだ」

「・・・なさいよ」

「え？」

「私を責めなさいよ！あんな毒薬を作った張本人なのよ？！あんな薬さえなければあなたはこんな思い　なんて・・・！私に会うことも無く、平和に今まで通りに暮らせてたのに！！！」

何故。彼は穏やかな目をしてるの？

まるで死期をまつ老人みたいに

私が憎くないの？恨んでないの？

蘭さんとの時間も奪った、勝手に、死んだ、とか言われて・・・

そんな時を作ったのも私なのに――・・・

「灰原！！！！」

「！」

工藤君の大きな声

私の叫びを一瞬で制した

「ああ、俺はお前が憎かった。腹が立って腹が立ってしょうがなかった」

ほら、どんなに外見を装っても内心は私に対する怒りで――

「でも、今は違う」

「・・・え？」

「お前がああ薬を作ってくれたおかげで俺は生きてる。薬が無かったら俺は拳銃でも殺されてかかも しんねーしな」

へへつと工藤君は笑った

「それに俺が縮まなかったら歩美達にも会えなかったしな！」

「コナンになって俺は成長した。人間としても、探偵としても」

「おめーがいてくれてよかったよ」

「おめーの作った薬で俺は助かったんだ」

「ありがとな」

なんで彼は・・・

こんなに優しい言葉をかけてくれるの・・・？

私は・・・彼の人生を狂わせたのに

「ありがとう」

この言葉を工藤君は私に言ってくれた

こんな真っ黒な私に

「っ……っ……！う……くっ……」

私は泣いた

この涙は悲しみなのか、嬉しさなのか分からない

でも涙を流していくうちに心が軽く

今まで溜め込んでいた黒いものが出て行く気がした

「頼まれなくても私からお願いするわよ。嫌がっても止めてあげないんだから……」

3人（こ…怖っ！…！）

「工藤良かつたなぐちっこいねーちゃん。頼み聞いてくれて」

「…良くねえよ」

「は？」

「蘭たち。どーすっかな」

「あ…なるほど」

「ま。明日考えるか。今日はもう寝る」

「せやな」

二人の影は工藤邸に消えていった

十一話（後書き）

っは~~~~~。。。。 - y（^。^）。。。

コメントお願いします>><

十二話

トントントン

「なあ…服部。眠れたか」

「いや。熟睡できんかったわ」

「やっぱり言えねえよ。…失明するかも、なんてな」

「ほんまや」

そう話しながら階段を下りてきたのは平次と新一だ
今は朝の8時、起きて来て朝食でも食べようかと…

「ねえ…どういうこと？」

「ちゃんと説明しいよ」

いるはずの無い人の声がした
ここにいるはずが無い
そう自分に言った。でも

そこにいるのは

蘭と和葉だ

「なんでここに…」

「工藤君と平次だけじゃどうせちゃんとしたもの食べへんからって、
蘭ちゃんが朝ごはん作りに来てくれたんよ！」

和葉はなぜか怒り口調だ

「って和葉。お前なに怒ってんねん」

「当たり前やろ！理由はわからへんけど、そないな大切なこと蘭ち
やんに黙ってたん？！
おかしいやろ！」

「和葉！工藤はな「もういいよ。服部」

新一が平次の言葉を制した

その顔は何かをあきらめたような、決意したような顔だった

「…説明するよ。少し長くなるけど」

蘭と和葉はうなずいた

新一はすべて話した
医師に話されたこと、すべて

二人は困惑していた
その後平次が気を利かせてか、和葉を連れて出て行った

「見えなくなるの？」

「…ああ」

「ばか」

「え？」

「ばかばかばかばか！！！！
治る可能性もあるって言ったじゃない！
なんで治るって言うてくれないの！なんで新一がその可能性を信じないの？！」

「その可能性だって、低いんだぜ？
それを…どう信じるって言うんだよ」

新一が出した笑みは自虐的な笑みだった

「もう…なにもかも限界なんだよっ…！」

そっつい新一の頬をつたったのは涙だった

人前で涙を見せなかった新一が、初めてみせた涙だった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3008y/>

未来へ

2011年12月3日21時49分発行